



二人で、「いのちの授業」の実践を重ね続ける（教師向セミナーにて）

のため会場は市民会館大ホール。生徒は聴くだけ。静かにしてくれていればとさえ思つていました」講師の鈴木中人は、実体験＝六歳までのいのちを精いっぱい輝かせた少女と家族の姿と思いを淡々と語つた。

「講演が始まると空気が一変。生徒は、景子ちゃんの生き様から『いのちの大切さ』を自分なりに感じ取る。保護者は、目頭を押さえて『子どもと自分は生きている』幸せを実感していました」

「講演の最後、「絶対に親より早く死んではいけない！」との鈴木さんの魂の叫びに、全員の体が硬直です。まさに『いのちの授業』と

「鈴木さんとの出会いは衝撃でした。教師が思いを一方的に押し付けてはいけない。子どもの『生きている喜び』『いのちの大切さ』を自らが感じ取ろうとする気持ちを持たせること。それが『いのちの授業』の極意だと仄ついたのです」玉置は、そうした学校のことを鈴木に伝えた。鈴木は言う。

「驚きました。講演後も、学校でいと違う子どもはいません。大切だと思っていることを、心底から大切だと思わせることこそ難しいのです。教師は、授業指導案などをなぞるような授業をつじしがちです。私もそうでした」

「いのちの授業」をつくる!
学校、社会に広げたい

「いのちの授業」をきっかけに、教師にも大きな変化が生まれた。K教諭が、「中学生は助けられる立小牧中学校で、「いのちの授業」二〇一三年八月、愛知県小牧市

生きたくても、生きられない子どもがいるんだ。
どうして、いのちを大切にしないのか！
一生懸命に生きるんだ！
話せば変えられる、変えなければならない！

思い上がり一でした。

子どもたちは、様々な現実をそれぞれが背負つています。一回の授業で変えられるものではありません。

「このちの授業」をきっかけに、
その子なりに「このち」「生きる」ことに何かを感じてくれればいい。自分に問いかけて、大切にしたい」とをみつけてくれればいい。

そう思うと、私の話し方も田線も変わりました。
すると、「私も」んな体験をしました」「私も思い悩んでいます」「心にしました。もう一度、がんばってみます」と、みんなが自然に心を開いて話してくれるようになりました。

を示す」ことに思ひます。

そんな思いを込めて、新刊本を上梓しました。
「いのちの授業」をつくる。

たくさんの「いのちの物語」に出会います。もしも自分ならどうするだろうかと問いかけてみてください。

この本を、ぜひ学校に届けていただければ幸いです。
あなたと子どもたちのために・・・。

「いのちの授業」を始めたとき、私の心の中にこはある反持ちがありました。

今、この間の出来事、どうも、心のままにならない。

「いのちの授業」は、何を、どう学ぶか？

鈴木 中人



新刊本
「いのちの授業」をつくる

「同じ眼差しでは、結果も同じ。これまでにない企画を考える方が、授業も広がるよ」と言われた。出版社に迷惑はかけられない。新企画を考えることにした。

一一〇一一年四月、鈴木と玉置で「いのちの授業」は何のために、何をすべきかを考えるセミナーを開催した（三回シリーズ）。同じテーマで二人がミニ講演をした後、玉置ゼミの大学生と語り合つた。鈴木は「

「大発見でした。『いのちの授業』の実践者と教師・校長体験者。体験も視点も違つからこそ、より深く広く、実践的で心に響くメッセージになるんです」

「人の共著で、いのちの本にしようとと思いました。でも、玉置さんは超多忙。さらに原稿を書いても出版できなければ無駄骨に…。無理だらうなあと思いつつメールしてみました」

数日後、玉置から返事が届いた。「嬉しいお誘いに感謝です。今の時代にこそ必要な本です。ぜひやりましょう!」

広げよう・いのちの授業

まず一人で本づくりの指向性を話し合つた。

教師向に、学校現場で活かせるように、現場の生の声に答えるものにする。具体的には、次の四つの柱を立てた。「いのちの授業」づくりの見方考え方、現場の悩みへのQ&A、実践ヒント、子どもへのメッセージ。それぞれで原稿を書いては、相談を重ねた。

三か月後、玉置より提案があつた。「内容はある程度固まりました。ユニークな企画だから、出版社で読んでもらってはいいでしょうか。私の方で出版社を探してみます」

二週間後、教育専門書のやぐら

広げよう——のちの授業

「いのちの大切さを学校で学ぼう」プロジェクトに取組んだ。鈴木は語る。

「いのちの授業を始めた二〇〇五年当時、学校現場では『がんはタブー』でした。でも、がんは国民病、小児がんの子どもにとって学校は生きる力、小児がんを通じて難病への支援・理解にもつながる。がん教育が全国で始まるこもあり、小児がんを題材に、いのちの授業となる副教材を制作して、全国の学校に届けることとしたのです。もちろん、一番に玉置さん

じのちのプロジェクト

の二点を回復も連絡して貰れたる交

この曲をかたずけた

の本』を出版して、全国の学校こ

100

玉置、鈴木、中学校長、養護教諭、小児がん専門医、映画監督が集い、授業指導案・授業DVD・副教材を制作。全国の教育委員会や学校に二万部を届けた。

その中で、玉置は「いのちの授業」への思いも鈴木に語った。

「若い私は体当たり教師で、校舎壁面に『玉置、死ね』と書かれたことも。家庭環境に恵まれない教え子がいました。中学卒業後、居酒屋に就職。「先生に、僕が初めてさばいた刺身を食べてほしい」と来てくれ、涙があふれました。数年後、彼はバイク事故で亡くなりました。

笑顔も学びの楽しさもある授業、学校づくりを試行錯誤してきました。私自身も病気になり、もう教壇に立てないと覚悟したこともあります。だからこそ、子どもたちが『生きる』『いのち』に向き合ってほしいのです」

二〇一九年、一人は、「いのち」とがん・小児がんを学ぶ本を学校に届けよう」プロジェクトにも取り組んだ。

子どもも自身が読める、「いのち

みんな、凶んでいる

鈴木は千校を超える学校を訪問し、「いのちの授業」の参加者は三十万人を超えた。

多くの子どもたち、教師、家族と出逢い、ある思いを強くした。「子どもたちに、いのちを大切にしてほしい! そう願つて、たくさんの方々が『いのちの授業』に取組んでいます。

現実の中で、戸惑い、悩み、壁にもぶつかってもいます。子どもの心はどうなつてているのか。いのちの大切さをどう伝えたらいいか。忙しい、やつても変わらない、空しくなる。学校だけでは解決できない壁がある。みんなはどうしているのだろう…。いじめ、自殺、虐待、凶悪犯罪、生きる実感の喪失、孤独化…。子

「いのちの授業」の実践ヒントもある。「いのちの授業」を広げてほしい。その思いを本にしよう!」まず、「いのちの授業」について全国の二百名を超える教育関係者から「いのちの志」が届いた。「みんな同じ思い。その思いに応えねば」と心が熱くなりました」□口ナ禍の中、約一年かけて教師向の本として原稿を書いた。そして、A編集長に読んでもらった。「大学での講義レベルですね。読者のすそ野を広げる、子どもにも読める方向で考えてみても良いのでは?」との感想だった。確かに読まれてこそその本である。

そこで、子ども向に仕立て直し

社（東京）の横山験也社長、良知令子副社長とオンライン会議となつた。率直に感想をもらつた。

「原稿の出来映えは、教育書として五十点です。でも、とても感動的、類似本が見当たらないユニークで大切な企画です。ぜひ一緒にやりましょう」

その後、原稿の全体構成、事例などの深掘り、表現方法など、一言一句まで見直した。

二〇一二年七月末、ついに本として仕上がった。

「いのちの授業」をつくる。

鈴木中人・玉置崇著、さくら社、約二百ページ、九月上梓。

内容は、「いのちの授業」とは何をどのように学ぶか＝根本の見方・考え方を考える（第一章）。明日に向かって、子どもたちに伝えたい「いのちのメッセージ」二十の話材集（第二章）と、その授業づくりに役立つ実践ヒント（三章）を提案。日々の学校現場で起こっている、教師が抱える「いのちの悩み」にも答える（第四章）。

鈴木と玉置が語る。

一〇二年七月末、ついに本と

対話と深掘りから、新たな提案ヒント、気づきが生まれたのではないかと思ひます。

Hピソーネは、いのちの実話です。たくさんの「いのちの物語」に出会います。『もしも自分なら、どうするだろうか』と問い合わせください。きっと、あなたの心を優しく確かなものにしてれます。家庭や地域でも読めます」

さらに、「広げよう—いのちの授業」プロジェクトにも取り組む。

学校現場で「いのちの授業」がより推進されることを願い、全国の教育委員会や学校などに本書を献本（田標一五〇〇冊）する。趣旨文・講演録・授業DVDも同封、特別価格での斡旋、寄付の募集も十一月末まで行つ。

趣旨文の一節を紹介する。

「みなさまのお力を賜り、『いのちの授業』を通じて、未来を託す子どもたちの『生きる力』を育み、その輪を社会に広げていただきたく心よりお願い申し上げます」

「いのちびと」47号



「みなさまのお力を賜り、『いのちの授業』を通じて、未来を託す子どもたちの『生きる力』を育み、その輪を社会に広げていただきたい一心よりお願い申し上げます」